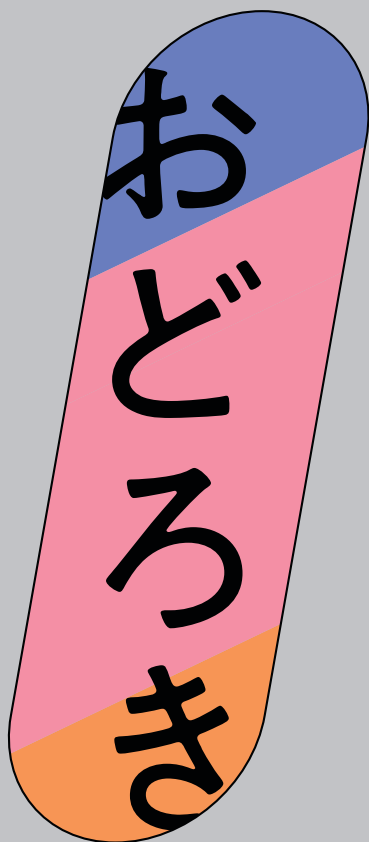
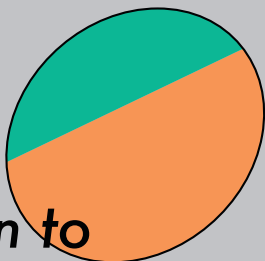
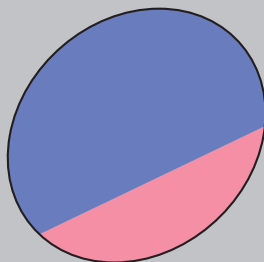


Grand Opening  
Exhibition

Open to  
Surprises



グランドオープン記念事業



Grand Opening  
Exhibition

Open to  
Surprises

おどろき

グランドオープン記念事業

あしたの

展覧会

## ごあいさつ

東京都渋谷公園通りギャラリーは、施設の改修工事に伴う休館を経て、2020年2月8日にグランドオープンを迎える運びとなりました。当ギャラリーは、アートを通してダイバーシティの理解促進や包容力のある共生社会の実現に寄与するため、アール・プリュットをはじめとするさまざまな作品の展示事業、交流事業や普及事業を展開し、一人ひとりの多様な創造性や新たな価値観に人々が触れる機会の創出に取り組んでまいります。

このたび、グランドオープンを記念し、展覧会「あしたのおどろき」を開催いたします。本展では、誰の日常にも潜在的にあるおどろきや発見といった体験をテーマに、アール・プリュットをはじめとする13組の作家の作品をご紹介します。

一つの作品を見て、作家の目や手の動きをなぞるとき、これまで自分が見ていた世界からわずかにはみ出すような、小さなおどろきや不意の発見に出会うかもしれません。今回ご覧いただく作品は、当たり前だと思っている私たちのものの見方をほんの少し揺さぶり、おどろきや発見の体験を朗らかに、あるいは時に鋭く際立たせます。

本展のさまざまな作品を通して、日常ことさら注目されないものや行為にあらためて光があたり、「きょう」とは違う「あした」がひらかれることを願います。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました作家の皆様、本展の実現のために貴重なご助言とご協力を賜りましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

会期 2020年2月8日(土) - 4月5日(日)  
会場 東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1、2  
主催 (公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館  
東京都渋谷公園通りギャラリー

2020年2月  
(公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館  
東京都渋谷公園通りギャラリー

Exhibition Period: Saturday, 8 February – Sunday, 5 April 2020  
Venue: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Galleries 1 and 2  
Organizer: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,  
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

## 凡例

- ― 本書は、東京都渋谷公園通りギャラリー グランドオープン記念事業 展覧会「あしたのおどろき」の出品作品を掲載している。
- ― 編集にあたり、各作家ページに図版を掲載し、図版キャプションは各所蔵機関より提供いただいたデータを参照し、「図版番号」「作品名」「制作年」「所蔵先」の順に和英で記載した。
- ― 展示替えを行った作品については、すべての作品図版を掲載した。
- ― 作家解説の末尾には、執筆者名をイニシャルで付した。執筆者は以下のとおりである。  
SM：佐藤真実子  
ID：石田大祐
- ― 作品リスト(pp. 46-47)では、「図版番号」「作家名」「作品名」「制作年」「技法・材質」「サイズ(cm)」「所蔵先」の順に和英で記載した。サイズは、平面作品・シャツ作品は縦×横、立体作品は縦×横×奥行、または、直径×高さの順に記した。
- ― 主要参考文献は、「展覧会カタログ」「その他図書」に分類し、項目ごとに出版年が早い順に並べた。
- ― コピーライト／写真クレジットは、巻末にまとめて掲載し、項目ごとに主にページ順に記した。

### Explanatory Notes:

- ― This catalogue contains artworks displayed in *Open to Surprises*, an exhibition held as a commemorative event of the Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery's Grand Opening.
- ― Plates are printed on each artist's page with captions that reference data provided by the artists and collectors. Data is given in Japanese and English in order of Catalogue Number, Title, Date, and Collection.
- ― In such case as artworks are rotated, plates for all artworks are displayed.
- ― Artists' biographies are followed by the author's initials, as follows:  
SM: SATO Mamiko  
ID: ISHIDA Daisuke
- ― List of works data (pp. 46-47) is given in order of Catalogue Number, Artist Name, Title, Date, Media, Size (cm), and Collection. Size is indicated by height x width for two-dimensional works and shirt works, and height x width x depth or diameter x height for three-dimensional works.
- ― The bibliography list contains principle references, categorized as Exhibition Catalogues and Other Books and listed by item in order of year of publication.
- ― Copyrights and photo credits appear at the back of the catalogue, where they are listed for each item principally in page order.

## 謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。  
(順不同／敬称略)

福迫弥麻  
藤岡浩子  
藤岡祐一  
山本美保

榎本紗香  
大塚芳子  
岡戸麻希子  
岡村幸宣  
奥山理子  
小野好美  
笠松彩菜  
上村徹也  
小出由紀子  
小山登美夫  
相良望人  
壽浦直子  
白岩高子  
福森 伸  
福森順子  
牧 高啓

浅尾朋次  
熊澤 弘  
盛本直美

アートオフィス塔本  
原爆の図丸木美術館  
小出由紀子事務所  
小山登美夫ギャラリー  
社会福祉法人 一羊会 あとりえずかけ・すずかけ絵画クラブ  
社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
特定非営利活動法人コーナス  
日本財団  
みずのき美術館  
有限会社マキファインアーツ  
Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo



## あしたのおどろき—アール・ブリュットをひらく

佐藤真実子

(東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員)

展示室にたたずみ、一つの作品を見て作家の目や手の動きをなぞると、これまで自分が見ていた世界からわずかにはみ出すような、小さなおどろきや発見に不意に出会うことがある。そのおどろきの連鎖が、新しい世界の扉をひらいてくれるはずである。

東京都渋谷公園通りギャラリーのグランドオープン記念事業である展覧会「あしたのおどろき」では、私たちの日常を少しずつ変容させてくれる小さなおどろきや発見の体験をテーマに、13組の作家を紹介する。

本展の一つの大きな特徴は、アール・ブリュットに関わる作家が多く含まれることである。まずそれらの作家の軌跡を簡単に辿ろう。このジャンルに長く携わる世田谷美術館の「開館記念展 芸術と素朴」(1986年)と、ほぼ同じタイトルの開館10周年記念特別展(1996年)では、丸木スマと塔本シスコがそれぞれ、アール・ブリュットと近い存在とみなされる素朴派の文脈で展示された。また、同館で、海外からの巡回展「パラレル・ヴィジョン 20世紀美術とアウトサイダー・アート」展(1993年)にあわせて独自に企画された「日本のアウトサイダー・アート」展では、小笹逸男が紹介された。その後、現代美術家を交えた展覧会が増えた2000年代には、「特別展「きのうよりワクワクしてきた。」 ブリコラージュ・アート・ナウ 日常の冒険者たち」(国立民族学博物館、2005年)で山本純子が、「Stitch by Stitch ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描くわたし」展(東京都庭園美術館、2009年)でnui projectが取り上げられた。

舛次崇は、すでに1990年代後半から数々の展覧会で注目されていたが、「Art Brut Japonais」展(アル・サン・ピエール、パリ、2010-11年)などの海外展を経て、代表的な作家の一人として位置づけられた。西岡弘治は、2010年代に増え始めた大規模な公募展の一つ「ポコラート全国公募展」の第2回(2011年)で入選を果たし、藤岡祐機は、全国の美術関係者などが作家を推薦する「すごいぞ、これは！」展(埼玉県立近代美術館他、2015-16年)で紹介され、それぞれ国内外へとさらに活動の幅を広げるようになる。

一方、HIROYUKI DOIは初めから国内の動きと距離を取り、「Obsessive Drawing」展(アメリカン・フォーク・アート・ミュージアム、ニューヨーク、2005-06年)をはじめ、欧米の美術館などでの展示を中心に活躍し評価を受けてきた作家である。

上に述べた作家とともに、本展では、当たり前の物事や制度の問い直しを行う4名の作家を取り上げる。小林勇輝は、多様な表現を用いて、自然だと思われている規範や固定観念を問う作品を発表している。末永史尚は、「絵画」によって絵画という制度を問いに付

す。デニス・ホリングスワースは、油彩を用いて絵画と彫刻との境界を揺るがすような作品を制作する。松岡亮は、ミシンを用いた刺繍作品によって、ファッションとアートの間を交差する活動を行っている。

このような13組の作家たちが、今回、どのようなおどろきをもたらしてくれるのか。次は、山型の壁が何層も配された展示室を順に巡って、壁の間に見え隠れする作品を探しながら、散策するように見ていこう。

まず西岡弘治のドローイングの前に進む。のびやかな五線譜や音符の形から、一体どんな不思議な旋律が生まれるのかをつい思い浮かべてしまう。振り返ると、次は小林勇輝のカンヴァスと真っ赤なファアの組み合わせにおどろかされ、ファアが何を表すのか想像をめぐらすだろう。奥へと進み、小笹逸男の愛らしい猫に出会ったら、一見他の動物のように見える猫らしくない猫に自ずと見入ってしまうはずだ。その後ろに控える塔本シスコの作品では、厚塗りの油彩を多くの家庭で見られるガラス瓶にも用いるという、塔本の技法と支持体の組み合わせの妙に唸られる。また、同じく油彩を描くデニス・ホリングスワースを発見し、平面でありながら立体性の希求が強く感じられる画面をいつまでも眺めてしまう。その横で迎えるのは、nui projectの吉本篤史、有村アイ子、野間口桂介の作品である。時間をかけた緻密な作業とそれぞれの関心を色濃く映し出す縫いの集積が、布やシャツから今にもはみ出して増殖するように見えて、目が丸くなる。

丸木スマの《花見》では、遠近法を逸脱した巨大な登場人物が中央に鎮座する姿に首をかしげるかもしれない。振り返った壁で待つ舛次崇の《うさぎと流木》では、きつとうさぎの後ろ足の位置を確認しながら、流木の存在を探してしまうだろう。舛次と向き合うHIROYUKI DOIのドローイングでは、繊細さと力強さを持ち合わせたその画面世界に圧倒されて、心に波が立つに違いない。

部屋を出るとき、危うく梱包材と見間違えそうな末永史尚の《タトウ箱》には大いにおどろかされる。ものとそれが置かれる空間との関係を観察し巧みに扱う末永ならではの「試み」は、展示室の随所に潜んでいる。次の部屋でまず目に飛び込む松岡亮の刺繍作品では、松岡の身体性が感じられるミシンの縫い目に思わず目を奪われる。山本純子のアップリケでは、かぼちゃ、ご飯、蕎麦と一緒に、なぜここにブーツが堂々と並べられているのか、不思議に思うだろう。そして、とうてい紙には見えない極細の柔らかくカールした藤岡祐機の紙片を見て、最後に小さくおどろきの声を上げてしまうかもしれない。

13組の作家の作品との対面を振り返ると、日常のありふれたものや光景を描いたり、誰もが手がける身近な技法や素材を用いたり、当たり前の物事や制度を再考しながら、その誰もが想像を超えるような表現で新しい発見の場を与えてくれる。また、アール・ブリュットとそれ以外の文脈で語られてきたものとの境界の濃淡についても、小さなおどろきをもたらしてくれるに違いない。それは、アール・ブリュットをさらにひらくきっかけにもなると考える。

本展で生まれるたくさんの小さなおどろきによって、見る人のものの見方とアール・ブリュットとが、「あした」へとさらにひらかれることを願ってやまない。

展示室にも随所におどろきが用意されている。山のような壁がさまざまな角度で立ち並ぶ空間では、壁の隙間から遠くに作品を望むこともあれば、次第に近づいた別の場所でもた同じ作品と再会して、間近でじっくりと対面することもある。まるで散策するように作品と作品の間を歩き、何度も違った見方で展覧会を楽しむことができるだろう。

Small surprises also await you in the gallery spaces. Mountain-shaped walls are placed at various angles, among which the artworks flicker in and out of view. Visitors see the artworks from afar through gaps among the walls as they enter the space and draw near the different works. Moving about the gallery, they are apt to meet the same artwork again while in a different location or suddenly find themselves standing face to face with it. By strolling among the artworks, in this way, visitors can enjoy seeing the exhibition from many different views.

ごあいさつ

東京都美術館で開催された、岡田豊樹1事に伴う美術展にて、2020年3月まで  
にゴッホのオーブンを展示し通じたり共演した。岡田・ゴッホは、アートを通してイキ・シモノ  
の美を伝えたいという熱い思いを共有し合う仲間であり、共に歩むため、アール・ブリュッセルは日本と  
するべき文化芸術の交流事業、文化事業や教育事業を展開し、一人ひとりの多様な創造  
性や育ちを尊重しに人々が抱く様々な思いの創造に寄り添うことを目指す。

このたび、グラフィックを監修し、映画を「おもしろき」を再現いたします。本館では、館の目録に所収の図によるたぐのタテマール、大衆をテーマに、アムール・グラフィックをまとめる15冊の全書の内容をご紹介いたします。

Q どの作品を見て、作家の筆名の魅力を感じたか。これまで自分が読んでいた作家もわかるには違いないが、ひとかたまりの才能の発見に出会ったか。また、今読んでいた作家は、自分が願っていたようなものか。自分の力でも追いつけるかもしれない、おどめの激励の言葉が記されて、あるいは巧みに誘導を受ける。

本報の再生産を作品として、目録にみれば決着されないものや行巻にあぐらあてたがみ  
たり、「おれはとらぬぞ」した」が問はずることと懸念した。

最後にもうひとつ、貴重作品として出品したいと出品作家に促す。本展の発展のため貴重作品の出品と協力に感謝の意を伝える。このお礼状は、上掲の

2020年2月



# 西岡弘治

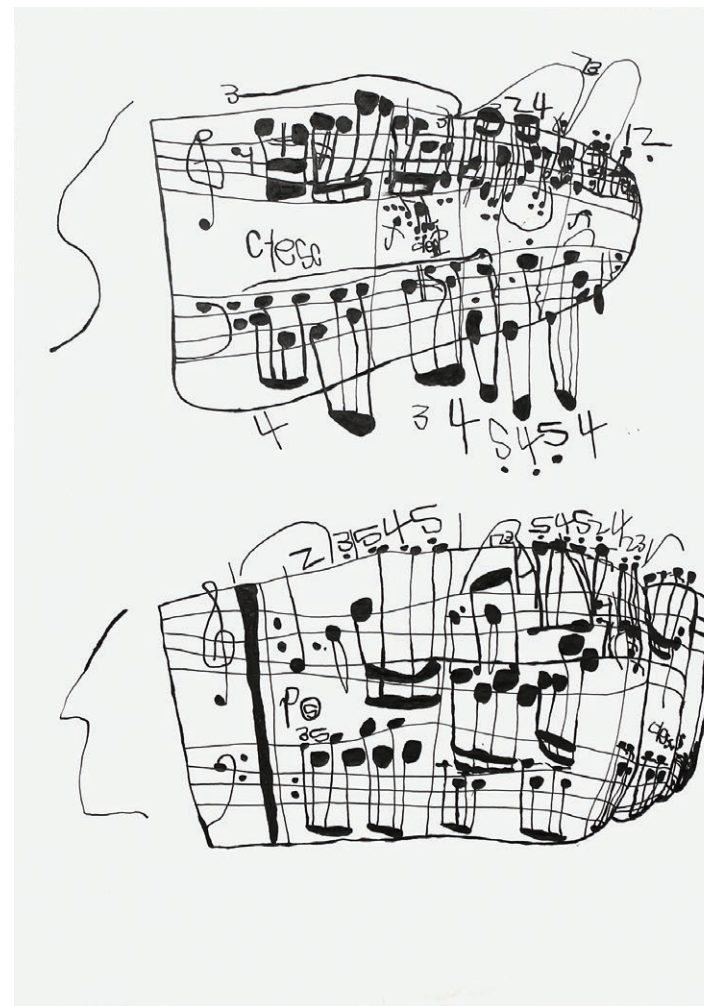
NISHIOKA Koji

楽譜は、西岡の代名詞といえる。クラシック音楽が子守歌代わりで幼い頃から常に音楽に親しんできた西岡は、彼が通うアトリエに古いピアノが寄贈されたことをきっかけに、楽譜をモチーフとするようになった。五線譜を表す細い線は実にのびやかに画面上を踊り、音符や文字、記号や数字は密集したり、時には十分な余白を取って思い思いの場所に並ぶ。音符に見える大きな楕円が、実際は音符どうしをつなぐ連符<sup>れんごう</sup>であったり、西岡のペンが描き出すリズムカルな画面は、見る者にささやかなおどろきをもたらしてくれる。

1970年、大阪府生まれ。大阪市の「アトリエコーナス」で、2005年より作品制作を始める。近年の展示に、「Art Brut du Japon, un autre regard」(アール・ブリュット・コレクション、ローザンヌ、2018-19年)など。作品はパリのabcdコレクションやイギリス、チチェスターのアウトサイド・インなどに収蔵。[SM]



001 楽譜SONATINE / 制作年不詳 / 特定非営利活動法人コーナス  
Score SONATINE / Date unknown / CORNERS



002 楽譜3 / 制作年不詳 / 特定非営利活動法人コーナス  
Score 3 / Date unknown / CORNERS

## 小林勇輝

KOBAYASHI Yuki

小林の作品にたびたび登場する四角形のパターンについて、曰く「単純な連続によって、ズレを可視化している」というように、なんらかの制約を受け、あるいは縛り付けられたときに表出する感情や意識に強く関心を持って活動する作家である。特に性に関する社会的なコードから生じる不自由さをあぶり出し、揺さぶろうとする姿勢は、彼が絵と平行して手がける身体表現にも共通する。女性用の衣服を着る、身体を縛るなどの状態で行われるパフォーマンスでは、性に関する先入観や刷り込まれた身振りを露見させ、見る者のジェンダー観や、身体の自由に関する固定観念を強く問う。

1990年、東京都生まれ。2019年までヨーロッパを拠点に活動。2016年、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート、パフォーマンス科修了。近年の主な活動に、展示及びパフォーマンス「Life of Athletics」(VACANT、東京、2018年)など。[ID]



003 Chaotic Love / 2017年 / 作家蔵  
Chaotic Love / 2017 / Collection of the artist





## 小笹逸男

OZASA Itsuo

絶妙でユーモラスな構図、卓越した色彩の感覚、どこか愛嬌がある動物の表情や仕草は、長い活動期間に一貫した独自性をつくりあげている。特に、モチーフが画面からはみ出すように、半身のみが見えている描き方は特徴的である。小笹を広く世に紹介した最初の展覧会は、世田谷美術館で開催された「日本のアウトサイダー・アート」展（1993年）だったといえるだろう。ダーガー、アロイズズらを紹介した「パラルレル・ヴィジョン 20世紀美術とアウトサイダー・アート」と並んで開催された展示であった。その翌年にはローザンヌのアール・ブリュット・コレクションに収蔵されるなど、日本を代表する作家として高く評価されている。

1924年、京都府生まれ、2012年没。1962年に入寮した「みずのき寮」（現みずのき／亀岡市）で、1964年から始まった「絵画教室」に参加し、その才能を徐々に開花させていった。[ID]



**004** 私の友達 / 1985-89年頃 / みずのき美術館  
My Friend / ca. 1985-89 / MIZUNOKI MUSEUM of ART, KAMEOKA



**005** 猫の像 / 1982年 / みずのき美術館  
Portrait of a Cat / 1982 / MIZUNOKI MUSEUM of ART, KAMEOKA

## 塔本シスコ

TOMOTO Shisuko



006 花ノ名前はクロッカスデス / 1998年 / 個人蔵  
This Flower is Crocus. / 1998 / Private collection

塔本は、紙やカンヴァスだけでなく、近所で集めたウィスキーの瓶や貝殻、時にはこたつの天板にまで絵筆を走らせ、子どもの頃の思い出や身の回りの出来事、自然を鮮やかな色彩で描き出す。瓶の凹凸をうまくモチーフの造形に活かしたり、同じカンヴァスでも大小サイズの異なるものや、カンヴァスと瓶のように支持体の異なるものを同時に並べて描き、色味やモチーフにかすかな関連性をもたせながら印象の違う作品へと展開させるなど、画材のやりくりや支持体に合わせた技法、その効果の研究にも余念がなかった。

1913年、熊本県生まれ、2005年没。53歳のとき、画家を志した長男が家に残していった油彩画の表面を削り落として、見よう見まねで絵を描き始める。世田谷美術館に作品が収蔵され、1996年の「開館10周年記念特別展コレクション10年の歩み 芸術と素朴」(世田谷美術館、東京)で展示されて以降、素朴派やアール・ブリュットに関連づけて語られている。[SM]



007 丸山明宏 / 制作年不詳 / 個人蔵  
MARUYAMA Akihiro / Date unknown / Private collection



008 丸山明宏 / 1998年 / 個人蔵  
MARUYAMA Akihiro / 1998 / Private collection



## デニス・ホリングスワース

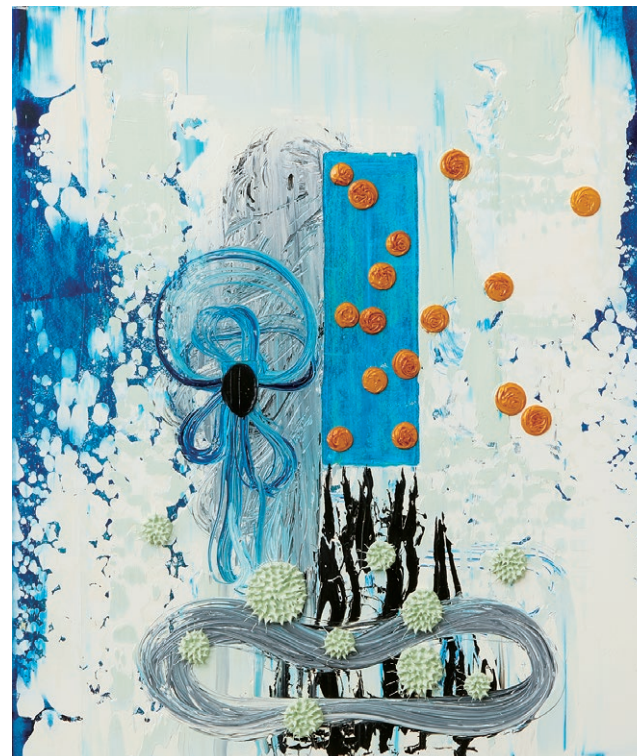
HOLLINGSWORTH, Dennis

しなやかで大胆なストローク、塗り重ねられてできた層、何かを押し付けたり、こそぎ取ったりしたような跡形、植物の種子のようなトゲつきの半球など、ホリングスワースの作品上で、絵具は実にさまざまに表情を見せる。未乾燥の画面に絵筆を入れる「wet on wet」など独自の手法の探求に余念がなく、絵画でありながら、造形的な手法が随所に見られる。偶然性と規則性が交わって現れる厚塗りの線や量塊の3次元性に加えて、草花や文字、人、動物などが画中に現れることもあり、絵画内外の空間に見る者の意識を誘う作家である。

1956年、スペイン、マドリード生まれ。1991年、クレアモント大学院大学修了。日本、アメリカ、ドイツなどで個展多数。国内での主な個展として「デニス・ホリングスワース展」（小山登美夫ギャラリー京都、京都、2011年）など。[ID]



009 Navigator (Wet on Wet #47) / 1997年 / 作家蔵  
Navigator (Wet on Wet #47) / 1997 / Collection of the artist



010 Whilst Whitman / 1997年 / 作家蔵  
Whilst Whitman / 1997 / Collection of the artist

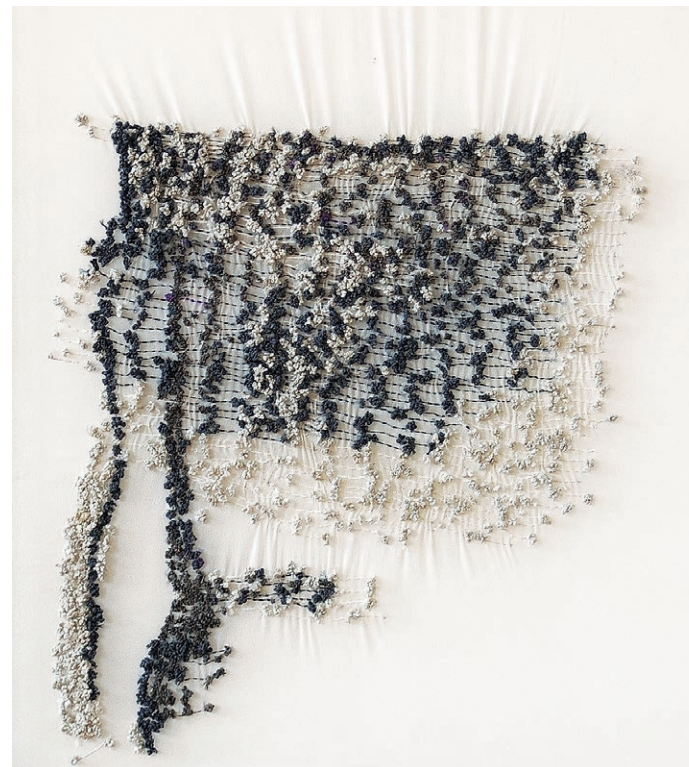
## nui project



**011** 吉本篤史 / 無題 / 2002年 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
YOSHIMOTO Atsushi / Untitled / 2002 / SHOBU STYLE

ともにnui projectで活動する吉本篤史、有村アイ子、野間口桂介。その刺繍は、当然のごとく三者三様である。玉結びを繰り返して塊状にして留める手法を用いた吉本の刺繍作品は、どれも繊細でありながら、素材との組み合わせによって異なる印象をもたらす。また、有村はさまざまな色の刺繍糸を然り合わせながら、限られた面積にねじりの効いた縫いを密集させ増殖させていく。野間口の作品は長い時間をかけて縫いを重ね合わせるため自然と重量感を帯びるが、強く糸を引っ張ることで生まれる適度なひきつりと相まって、独自の表情を見せる。

nui projectは、鹿児島市にある「しょうぶ学園」の「布の工房」の縫い手たちからなる。大島紬の下請け作業などを経て、個々の自由を尊重した縫いへと移行。1992年より本格的に活動を開始。「Fabulous Fabrics: Made in Japan」(クリエイティブ・グロース・アート・センター、オークランド、2003年)など、2000年頃より国内外で発表を行う。[SM]



**012** 吉本篤史 / 無題 / 2003-05年 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
YOSHIMOTO Atsushi / Untitled / 2003-05 / SHOBU STYLE





**013** 有村アイ子 / 無題 / 2006年頃 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
ARIMURA Aiko / Untitled / ca. 2006 / SHOBU STYLE



**014** 野間口桂介 / 無題 / 2012-16年 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
NOMAGUCHI Keisuke / Untitled / 2012-16 / SHOBU STYLE





## 丸木スマ

MARUKI Suma



015 梅が咲く / 1952年 / 原爆の図丸木美術館

Plum Blossoms Blooming / 1952 / Maruki Gallery for the Hiroshima Panels Foundation

丸木は表情豊かな動物や、生命力に満ちた花、野菜など、700点を超える膨大な数の作品を残した。生き生きと描かれた動物の上を大胆に横切る木の幹や枝。他のモチーフに比べて極端に大きく描かれ、有り余るほどの存在感を放つ人物像。丸木の描写には、遠近法など絵画の種々の規則といったものを軽々と逸脱する大胆さがある。70歳を過ぎてから絵画制作に取り組んだことから、しばしば「おばあちゃん画家」と形容されてきた。しかし、丸木が自ら習得した異なる技法を巧みに使い分けて構成する画面を見れば、その呼び方はもはや正しくないことがわかる。

1875年、広島県生まれ、1956年没。1945年の原爆により夫や親族を亡くした後、息子で画家の丸木位里とその妻、丸木俊のすすめで絵を描き始める。制作を始めてから3年目の1951年に初めて日本美術院展に入選。1986年の「開館記念展 芸術と素朴」(世田谷美術館、東京)では、「素朴派」と関連づけて紹介された。[SM]



016 花見 / 1949年 / 原爆の図丸木美術館

Cherry Blossom Viewing / 1949 / Maruki Gallery for the Hiroshima Panels Foundation



## 舛次 崇

SHUJI Takashi



**017** うさぎと流木 / 2008年 / 日本財団  
Rabbit and Driftwood / 2008 / The Nippon Foundation

舛次の作品には茶や青、白も部分的に見られるが、塗り込められた黒の塊が大きな特徴である。紙の上に覆いかぶさるように上半身を折り曲げ、顔を近づけ両手で紙をなでながら、観察したものを独自の造形としてパステルで写し出す。モチーフには植物の鉢や花瓶、工具など身の回りのものや、図鑑から着想を得た動物などが選ばれるが、しばしば画面に収まりきらずに途中で切れてしまうことさえある。特に黒の色面や余白には、舛次の目や手の動きの跡が豊かに現れ出ている。

1974年、兵庫県生まれ。1993年頃から月に2回開催される「すずかけ絵画クラブ」(西宮市)で作品制作に取り組む。主な展示に、「Japon」(アール・ブリュット・コレクション、ローザンヌ、2008-09年)、「Art Brut Japonais」(アル・サン・ピエール、パリ、2010-11年)など。作品はローザンヌのアール・ブリュット・コレクションなどに収蔵。[SM]



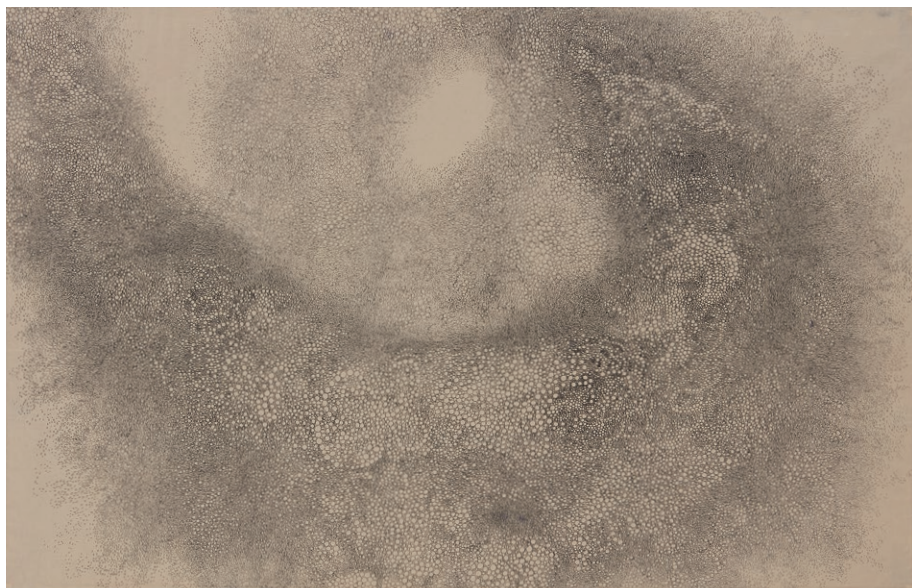
**018** ペンチとドライバーとノコギリとパンチ / 2006年 / 日本財団  
Pliers, Screwdriver, Saw and Punch / 2006 / The Nippon Foundation



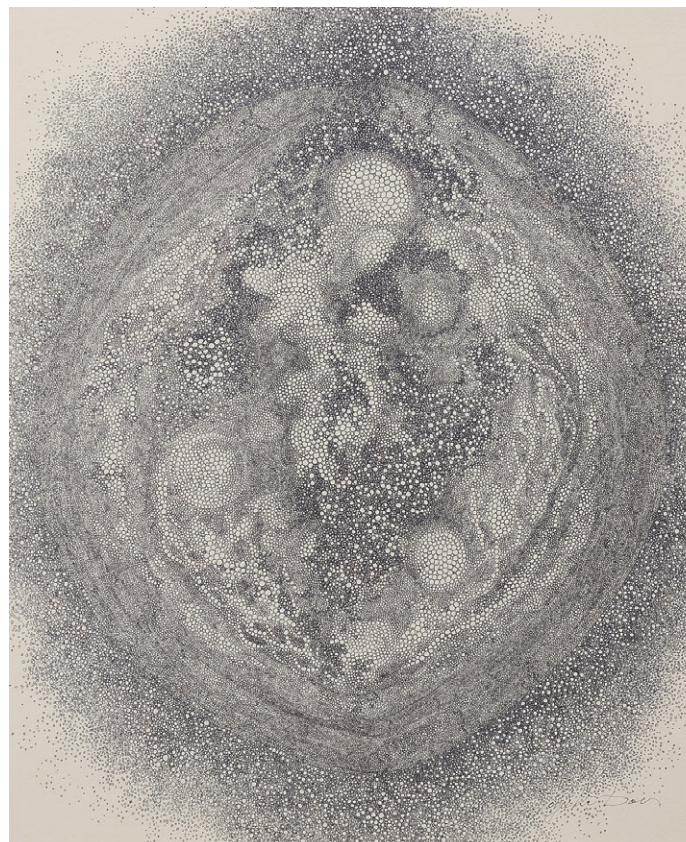
## HIROYUKI DOI

一種類の極細の油性ペンで描かれた小さなまるとの集積が、緻密でありながら力強い画面世界をつくりあげている。DOIはあらゆるジャンルを手がけたが、1985年頃からこの細かなまるとを描く手法に定着した。使用した結果、先が細くなったペンで描かれた細くて美しい線とまるとの大小による効果をうまく活かして、画面に柔らかなグラデーションを生み出す。一度完成させた後に再び描き加えたという《Peace》(cat. no. O20)では、アーモンド型の中央部分と、その周辺を覆う炎のような描写において、まるとの形やその密度に年を経たわずかな違いが見えて興味深い。

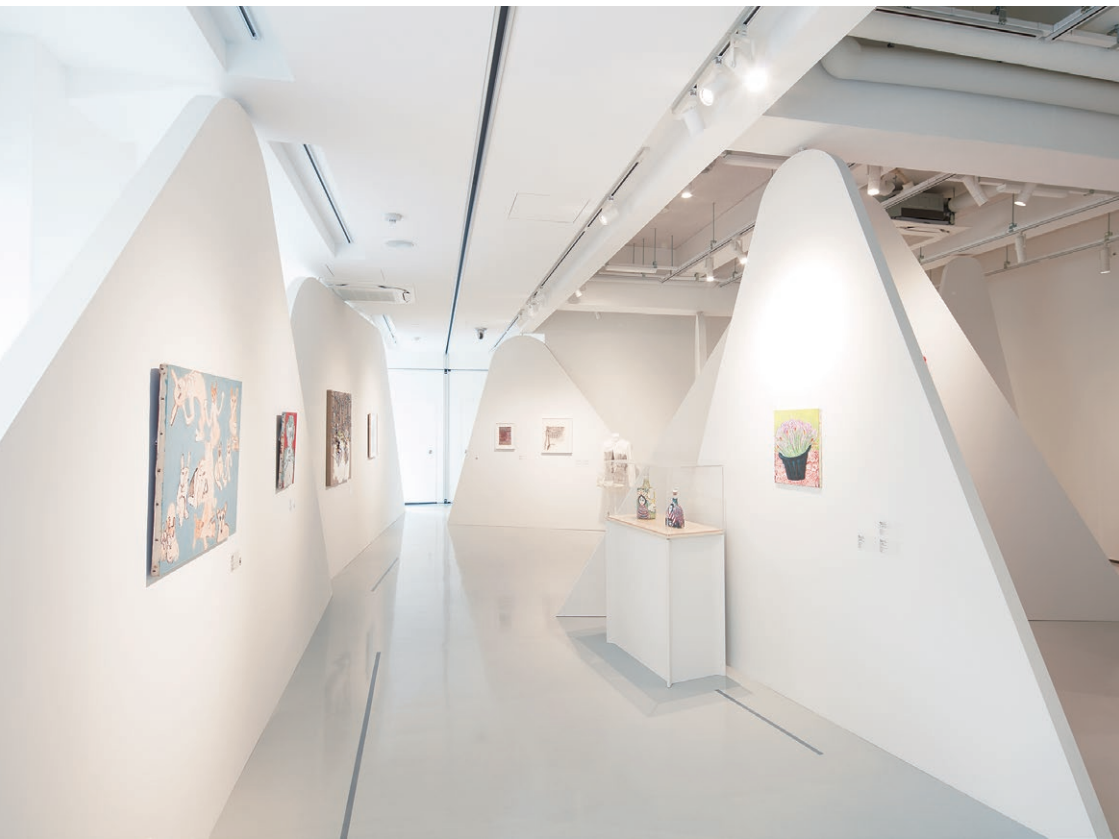
1946年、愛知県生まれ。シェフとして長年勤めながら、独学で作品制作を行う。2001年から欧米を中心に活躍。近年の展示に、「Memory Palaces: Inside the Collection of Audrey B. Heckler」(アメリカン・フォーク・アート・ミュージアム、ニューヨーク、2019-20年)など。作品はニューヨークのアメリカン・フォーク・アート・ミュージアム等に収蔵。[SM]



**019** 無題 / 2017年 / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo  
Untitled / 2017 / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo



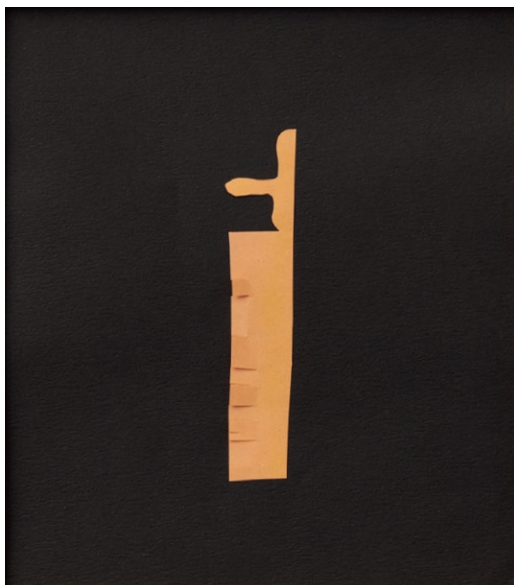
**020** Peace / 2010年 / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo  
Peace / 2010 / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo





## 藤岡祐機

FUJIOKA Yuki



021 無題 / 2002年9月22日 / 作家蔵

Untitled / September 22, 2002 / Collection of the artist

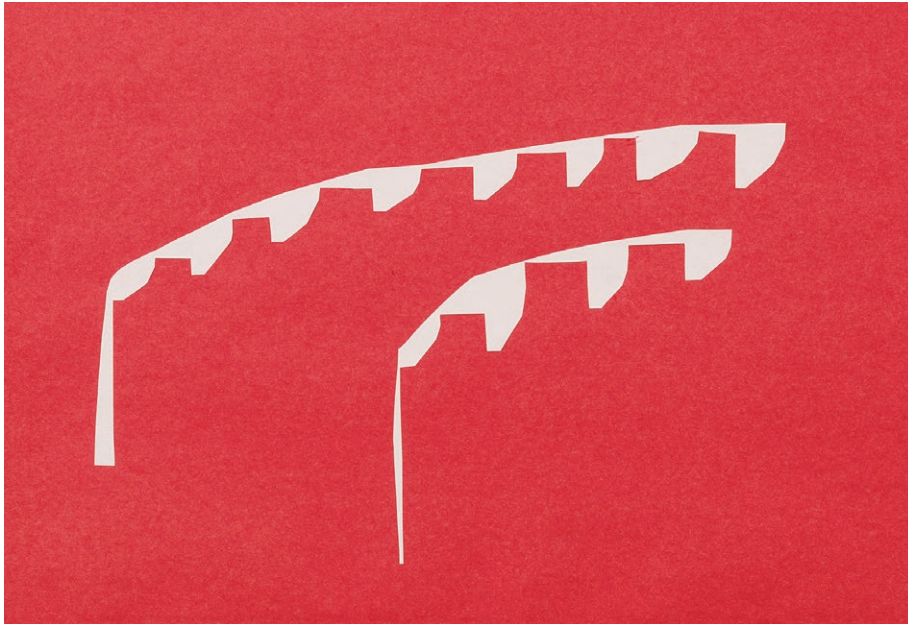
藤岡が幾何学形に切り落とした紙を、その置かれた向きと配置のまま母親が台紙に貼りつける「共同制作」によるコラージュから、藤岡の作品制作は始まった。以後、彼の切る行為への執着は増していき、興味の対象は「形を切る」ことから「切り込み」へと移る。現在は1mmにも満たない間隔で切り込みを入れる作品へと展開。ハサミをやや傾け、紙をそぐように切る効果からか、紙片には細かなカールが生まれる。ほどけた糸と見間違えそうな極細の紙片が絡まり合いながら、紙の裏面と表面の色をやさしく混ぜ合わせ、藤岡の作品にグラデーションを添えている。

1993年、熊本県生まれ。幼少期に祖母から受け取ったハサミがきっかけとなり、切る行為を気に入る。近年は海外展にも参加。主な展示に「ATTITUDE 2002」（熊本市現代美術館、2002年）、「Art Brut-Japan-Schweiz」（ラガーハウス・ミュージアム、ザンクト・ガレン、2014年）など。[SM]



022 無題 / 2002年9月28日 / 作家蔵

Untitled / September 28, 2002 / Collection of the artist



**023** 無題 / 2004年4月14日 / 作家蔵  
 Untitled / April 14, 2004 / Collection of the artist



**024** 無題 / 2004-05年 / 作家蔵  
 Untitled / 2004-05 / Collection of the artist



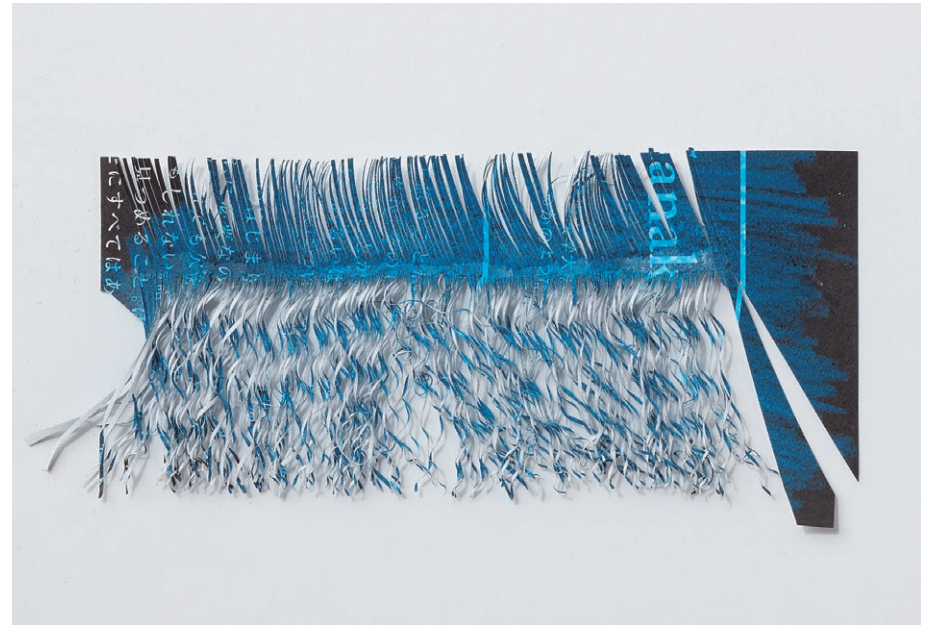
**025** 無題 / 2006-09年 / 作家蔵  
 Untitled / 2006-09 / Collection of the artist



**026** 無題 / 2009-12年 / 作家蔵  
 Untitled / 2009-12 / Collection of the artist



**027** 無題 / 2009-12年 / 作家蔵  
 Untitled / 2009-12 / Collection of the artist



**028** 無題 / 2006-09年 / 作家蔵  
 Untitled / 2006-09 / Collection of the artist



## 松岡 亮

MATSUOKA Ryo



ライブペインティングシーンの重要人物として数えられる松岡の制作を見てまず驚くのは、その速筆さである。素手で描くこともあれば、ミシンを用いて制作することもあるが、いずれも作者の律動がそのまま形を成していく。色鮮やかな線が次々と生まれてくる様は軽快だ。作品が醸す臨場感は、雪上を歩いてラインを描いた即興の作品がまさにそうであるように、身体性と作品の徹底的な一致に支えられている。作者個人の身体であるにもかかわらず、多くの鑑賞者が心地よさを感じるのは、人体の構造に従った自然な動きや、色や線に対して人が感じる快感の普遍的な部分と呼应しているからかもしれない。

1974年、東京都生まれ。国内外で展示に参加するほか、公開制作や共同制作にも精力的に取り組む。[ID]



029 無題 / 2019年 / 作家蔵

Untitled / 2019 / Collection of the artist



# 山本純子

YAMAMOTO Junko



030 無題 / 1990年代 / 作家蔵  
Untitled / 1990s / Collection of the artist



031 無題 / 1990年代 / 作家蔵  
Untitled / 1990s / Collection of the artist

具象と抽象の間を行き来するような特徴あるフォルム。台所用品や食べ物、掃除道具や工具など、日常で目にした身近なものが、山本によって単純化され、色とりどりのフェルトでアップリケされている。山本のアップリケでは、その造形や配色に加えて、縫い目も重要な要素である。土台となる布の四辺を折り返して縫い合わせるステッチをはじめ、フェルトを縫いつけるまつり縫いのステッチ、出展作品 (cat. no. 032) に見られる細い蕎麦の描写を表す紫色のステッチやかぼちゃのゴツゴツした凹凸を表すステッチなど、山本の手動きの跡もまた、布の上に豊かな表情を生み出している。

1973年、兵庫県生まれ。手芸のアトリエを開く母親のもとにあった材料の中でも特にフェルトを気に入り、独学でアップリケを始める。作品はパリのabcdコレクション、ロンドンを拠点とし世界各地を移動するミュージアム・オブ・エブリシングなどに収蔵されている。[SM]



032 無題 / 1990年代 / 作家蔵  
Untitled / 1990s / Collection of the artist

## 末永史尚

SUENAGA Fuminao

末永はしばしば日常的なものや展示空間に関わる既存のものなどのイメージを介し、ものとそれが置かれる場所や空間との関係を慎重かつ巧みに用いて見る者の目を誘う。そのために、末永は独自の視点でそれぞれのモチーフの表面の要素を抽出し、それを同サイズのパネルに写し取るという手法を中心的に用いている。また、文様を表す部分も含め大小さまざまな色面も大きな特徴である。複雑に調査された絵具の色味や、丁寧に塗りこめられた色面のかすかな筆の跡、色面の境界に生じるエッジの小さな盛り上がりは、彼の作品がたとえ立体的であってもあくまで「絵画」であるということを強く意識させる。

1974年、山口県生まれ。1999年、東京造形大学造形学部美術学科卒業。「日用品をモチーフにした立体絵画」や「ミュージアム・ピース」のほか、多くのシリーズを手がける。近年の展示に、「アートセンターをひらく（第Ⅰ期 第Ⅱ期）」展（水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城、2019-20年）など。[SM]



**033** ピクチャーフレーム / 2020年 / 作家蔵  
Picture Frame / 2020 / Collection of the artist



**034** ピクチャーフレーム / 2020年 / 作家蔵  
Picture Frame / 2020 / Collection of the artist



**035** タトウ箱 / 2016年 / 作家蔵  
Boxes for Paintings / 2016 / Collection of the artist



**039** 箱 / 2020年 / 作家蔵  
Box / 2020 / Collection of the artist



**036** 糸巻き / 2020年 / 作家蔵  
Thread / 2020 / Collection of the artist



**037** 糸巻き / 2020年 / 作家蔵  
Thread / 2020 / Collection of the artist



**038** 糸巻き / 2020年 / 作家蔵  
Thread / 2020 / Collection of the artist





## 作品リスト List of Works

**001** 西岡弘治 / 楽譜 SONATINE / 制作年不詳 / インク・紙 / 36.4×25.6 / 特定非営利活動法人コーナス  
NISHIOKA Koji / Score SONATINE / Date unknown / Ink on paper / CORNERS

**002** 西岡弘治 / 楽譜 3 / 制作年不詳 / インク・紙 / 36.4×25.6 / 特定非営利活動法人コーナス  
NISHIOKA Koji / Score 3 / Date unknown / Ink on paper / CORNERS

**003** 小林勇輝 / Chaotic Love / 2017年 / 油彩、アクリル・カンヴァス、ファー / 137.0×100.0 / 作家蔵  
KOBAYASHI Yuki / Chaotic Love / 2017 / Oil and acrylic on canvas with fur / Collection of the artist

**004** 小笹遼男 / 私の友達 / 1985-89年頃 / アクリル・カンヴァス / 60.6×72.6 / みずのき美術館  
OZASA Itsuo / My Friend / ca. 1985-89 / Acrylic on canvas / MIZUNOKI MUSEUM of ART, KAMEOKA

**005** 小笹遼男 / 猫の像 / 1982年 / アクリル、木炭・カンヴァス / 41.0×31.9 / みずのき美術館  
OZASA Itsuo / Portrait of a Cat / 1982 / Acrylic and charcoal on canvas / MIZUNOKI MUSEUM of ART, KAMEOKA

**006** 塔本シスコ / 花ノ名前はクロッカスデス / 1998年 / 油彩・カンヴァス / 41.0×32.0 / 個人蔵  
TOMOTO Shisuko / This Flower is Crocus. / 1998 / Oil on canvas / Private collection

**007** 塔本シスコ / 丸山明宏 / 制作年不詳 / 油彩・瓶 / 26.0×15.5×5.5 / 個人蔵  
TOMOTO Shisuko / MARUYAMA Akihiro / Date unknown / Oil on bottle / Private collection

**008** 塔本シスコ / 丸山明宏 / 1998年 / 油彩・瓶 / 31.0×11.5×11.5 / 個人蔵  
TOMOTO Shisuko / MARUYAMA Akihiro / 1998 / Oil on bottle / Private collection

**009** デニス・ホリングスワース / Navigator [Wet on Wet #47] / 1997年 / 油彩・カンヴァス、板 / 91.5×81.3 / 作家蔵  
HOLLINGSWORTH, Dennis / Navigator [Wet on Wet #47] / 1997 / Oil on canvas on board / Collection of the artist

**010** デニス・ホリングスワース / Whilst Whitman / 1997年 / 油彩・紙 / 45.7×38.1 / 作家蔵  
HOLLINGSWORTH, Dennis / Whilst Whitman / 1997 / Oil on paper / Collection of the artist

**011** nui project 吉本篤史 / 無題 / 2002年 / 手刺繍・綿シャツ、ミクストメディア / 80.0×152.0 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
nui project YOSHIMOTO Atsushi / Untitled / 2002 / Hand embroidery on cotton shirt with mixed media / SHOBU STYLE

**012** nui project 吉本篤史 / 無題 / 2003-05年 / 手刺繍・オーガンジー、綿糸 / 51.5×46.5 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
nui project YOSHIMOTO Atsushi / Untitled / 2003-05 / Hand embroidery with cotton threads on organdy / SHOBU STYLE

**013** nui project 有村アイ子 / 無題 / 2006年頃 / 手刺繍・麻、綿糸 / 31.0×39.0 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
nui project ARIMURA Aiko / Untitled / ca. 2006 / Hand embroidery with cotton threads on linen / SHOBU STYLE

**014** nui project 野間口桂介 / 無題 / 2012-16年 / 手刺繍・綿シャツ、ミクストメディア / 60.0×96.0 / 社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園  
nui project NOMAGUCHI Keisuke / Untitled / 2012-16 / Hand embroidery on cotton shirt with mixed media / SHOBU STYLE

**015** 丸木スマ / 梅が咲く / 1952年 / 水墨彩色・紙 / 56.0×93.5 / 原爆の図丸木美術館  
MARUKI Suma / Plum Blossoms Blooming / 1952 / Sumi and color on paper / Maruki Gallery for the Hiroshima Panels Foundation

**016** 丸木スマ / 花見 / 1949年 / 水墨彩色・紙 / 90.0×90.0 / 原爆の図丸木美術館  
MARUKI Suma / Cherry Blossom Viewing / 1949 / Sumi and color on paper / Maruki Gallery for the Hiroshima Panels Foundation

**017** 舩次 崇 / うさぎと流木 / 2008年 / パステル・厚紙 / 54.0×76.8 / 日本財団  
SHUJI Takashi / Rabbit and Driftwood / 2008 / Pastel on cardboard / The Nippon Foundation

**018** 舩次 崇 / ベンチドライバーとノコギリとパンチ / 2006年 / パステル・水彩紙 / 54.6 x 79.0 / 日本財団  
SHUJI Takashi / Pliers, Screwdriver, Saw and Punch / 2006 / Pastel on watercolor paper / The Nippon Foundation

**019** HIROYUKI DOI / 無題 / 2017年 / インク・和紙 / 62.5 x 97.0 / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo  
HIROYUKI DOI / Untitled / 2017 / Ink on washi / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo

**020** HIROYUKI DOI / Peace / 2010年 / インク・紙 / 45.7 x 38.1 / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo  
HIROYUKI DOI / Peace / 2010 / Ink on paper / Yoshiko Otsuka Fine Art International, Tokyo

**021** 藤岡祐機 / 無題 / 2002年9月22日 / 紙 / 12.7×11.3 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / September 22, 2002 / Paper / Collection of the artist

**022** 藤岡祐機 / 無題 / 2002年9月28日 / 紙 / 25.2×14.7 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / September 28, 2002 / Paper / Collection of the artist

**023** 藤岡祐機 / 無題 / 2004年4月14日 / 紙 / 23.3×34.9 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / April 14, 2004 / Paper / Collection of the artist

**024** 藤岡祐機 / 無題 / 2004-05年 / 紙 / 4.7×14.3 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / 2004-05 / Paper / Collection of the artist

**025** 藤岡祐機 / 無題 / 2006-09年 / クレヨン・紙 / 7.5×11.1 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / 2006-09 / Crayon on paper / Collection of the artist

**026** 藤岡祐機 / 無題 / 2009-12年 / 紙 / 6.3×13.4 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / 2009-12 / Paper / Collection of the artist

**027** 藤岡祐機 / 無題 / 2009-12年 / クレヨン・紙 / 6.2×14.5 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / 2009-12 / Crayon on paper / Collection of the artist

**028** 藤岡祐機 / 無題 / 2006-09年 / クレヨン・紙 / 5.7×11.2 / 作家蔵  
FUJIOKA Yuki / Untitled / 2006-09 / Crayon on paper / Collection of the artist

**029** 松岡 亮 / 無題 / 2019年 / 刺繍・布 / 300.0×200.0 / 作家蔵  
MATSUOKA Ryo / Untitled / 2019 / Embroidery on fabric / Collection of the artist

**030** 山本純子 / 無題 / 1990年代 / アップリケ・フェルト、布、糸 / 38.3×38.0 / 作家蔵  
YAMAMOTO Junko / Untitled / 1990s / Felt applique on cloth / Collection of the artist

**031** 山本純子 / 無題 / 1990年代 / アップリケ・フェルト、布、糸 / 23.3×29.0 / 作家蔵  
YAMAMOTO Junko / Untitled / 1990s / Felt applique on cloth / Collection of the artist

**032** 山本純子 / 無題 / 1990年代 / アップリケ・フェルト、布、糸 / 36.5×36.5 / 作家蔵  
YAMAMOTO Junko / Untitled / 1990s / Felt applique on cloth / Collection of the artist

**033** 末永史尚 / ピクチャーフレーム / 2020年 / アクリル、顔料、金泥・綿布、木製パネル / 70.2×81.6×4.8 / 作家蔵  
SUENAGA Fuminao / Picture Frame / 2020 / Acrylic, pigment, gold paint on cotton and panel / Collection of the artist

**034** 末永史尚 / ピクチャーフレーム / 2020年 / アクリル、顔料、金泥・綿布、木製パネル / 49.5×59.0×5.0 / 作家蔵  
SUENAGA Fuminao / Picture Frame / 2020 / Acrylic, pigment, gold paint on cotton and panel / Collection of the artist

**035** 末永史尚 / タトウ箱 / 2016年 / アクリル、顔料・合板 / 61.0×50.0×4.0 / 53.0×41.5×4.0 / 42.0×30.0×7.0 / 作家蔵  
SUENAGA Fuminao / Boxes for Paintings / 2016 / Acrylic, pigment on plywood / Collection of the artist

**036** 末永史尚 / 糸巻き / 2020年 / アクリル、顔料・紙、合板 / φ3.0×4.0 / 作家蔵  
SUENAGA Fuminao / Thread / 2020 / Acrylic, pigment on paper and plywood / Collection of the artist

**037** 末永史尚 / 糸巻き / 2020年 / アクリル、顔料・紙、合板 / φ3.0×4.0 / 作家蔵  
SUENAGA Fuminao / Thread / 2020 / Acrylic, pigment on paper and plywood / Collection of the artist

**038** 末永史尚 / 糸巻き / 2020年 / アクリル、顔料・紙、合板 / φ3.0×4.0 / 作家蔵  
SUENAGA Fuminao / Thread / 2020 / Acrylic, pigment on paper and plywood / Collection of the artist

**039** 末永史尚 / 箱 / 2020年 / アクリル、顔料・合板 / 14.5×10.5×3.5 / 作家蔵  
SUENAGA Fuminao / Box / 2020 / Acrylic, pigment on plywood / Collection of the artist



## Foreword

The Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery will hold its Grand Opening on February 8, 2020 after closing for renovation. The Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery seeks to promote understanding of diversity and contribute to the realization of a tolerant, socially cohesive society through art. To this end, it offers exhibits of Art Brut and other wide-ranging art genres, as well as interactive programs and dissemination programs, to provide people with opportunities for contact with new values and the diversity of individual creativity.

To celebrate its Grand Opening, the Gallery is holding the exhibition *Open to Surprises*. Through works by 13 artists and artist group, including Art Brut creators, the exhibition casts light on the surprises and discoveries latent in our everyday lives.

When you view a work of art and follow the movements of the artist's eye and hand, you may encounter small surprises and unexpected discoveries that veer slightly outside the world you have known until now. The works displayed, this time, slightly jolt our habitual perspectives on things, giving us an experience of surprise or discovery that is refreshing or, at times, keen.

We hope that the exhibition, through its varied selection of works, will illuminate things and actions easily overlooked in our everyday lives and invite a new "tomorrow" different from "today."

We wish to express our deep gratitude to the artists for their generous loan of works for this exhibition. We would also like to thank everyone who has given their support and cooperation in its realization.

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,  
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture  
February 2020

## Open to Surprises—Turning Art Brut Loose

SATO Mamiko

(Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

When standing in a gallery before an artwork, following the movements of its artist's eye and hand, you may encounter a small surprise or unexpected discovery that veers slightly outside the world you have known until now. Such surprises have a power to open the door for you to a new world.

The exhibition *Open to Surprises*, a commemorative event of Tokyo Shibuya Koen-Dori Gallery's Grand Opening, presents twelve artists and one artist group under the theme of experiencing small surprises and discoveries that little by little change the way we look at things.

An important feature of this exhibition is its inclusion of numerous artists associated with Art Brut. Let us begin by briefly outlining these artists' careers. MARUKI Suma and TOMOTO Shisuko exhibited in the context of naïve art (a genre close to Art Brut) at Setagaya Art Museum, Tokyo, a museum long involved with Outsider Art and Art Brut. Maruki appeared in the Setagaya Art Museum's *Naivety in Art* (1986) and Tomoto in its tenth anniversary exhibition of nearly the same title (1996). OZASA Itsuo was featured in the *Japanese Outsider Art* exhibition (1993) held at the same museum in conjunction with the traveling exhibition *Parallel Visions: Modern Artists and Outsider Art*. Thereafter, in the 2000s when such exhibitions began mixing in mainstream artists, YAMAMOTO Junko appeared in *More Happy Every Day: The World of Bricolage Art* (National Museum of Ethnology, 2005), and nui project was featured in *Stitch by Stitch: Traces I Made with Needle and Thread* (Tokyo Metropolitan Teien Art Museum, 2009).

SHUJI Takashi garnered attention in exhibitions in the late 1990s then later emerged as a leading artist after appearing in *Art Brut Japonais* (Halle Saint Pierre, Paris, 2010-11) and other overseas exhibitions. NISHIOKA Koji was selected for *POCORART National Open Call Exhibition vol.2* (2011), one of the large-scale "public entry" exhibitions increasingly held in the 2010s. On this footing, he expanded his sphere of activity, as did FUJIOKA Yuki after being featured in *This is Amazing!* (The Museum of Modern Art, Saitama and other museums, 2015-16).

HIROYUKI DOI, on the other hand, stepped away from developments in Japan and won acclaim at shows in Europe and the United States, such as *Obsessive Drawing* (American Folk Art Museum, New York, 2005-06).

Along with the above artists, this exhibition also features four who re-examine commonplace objects and institutions. KOBAYASHI Yuki produces works that question norms and stereotypes taken for granted using varied art media. SUENAGA Fuminao, through "painting," questions the system surrounding painting. DENNIS HOLLINGSWORTH creates oil painting works that blur the boundary between painting and sculpture, while MATSUOKA Ryo crosses the gap between fashion and art by

means of embroidery using a sewing machine.

What kind of surprises do these twelve artists and one artist group hold for us, this time? Let us next take a stroll in the gallery—moving in order of the exhibits on the mountain-shaped walls arranged within—to see the works which flicker in and out of view between the walls.

First, we will pause before NISHIOKA Koji's drawings. Savoring the fluid lines of the music staves and shapes of their notes, we wonder, what kind of mysterious melody might be forthcoming? Turning around, we are surprised to see KOBAYASHI Yuki's pairing of bright red fur with canvas, letting our imaginations run to what the fur might express. Going deeper in the gallery, we encounter OZASA Itsuo's charming cats, which at first glance appear like an unnamable fanciful animal. Turning to TOMOTO Shisuko's works behind us, we are struck by their surprising combination of medium and support—oil paint brushed thickly on glass bottles seen in many homes. Moving on, we happen on DENNIS HOLLINGSWORTH, who also paints in oils, and stand transfixed by canvases that, while flat, seem to yearn for three-dimensionality. Nearby are works by nui project members YOSHIMOTO Atsushi, ARIMURA Aiko, and NOMAGUCHI Keisuke. Our eyes grow round at the aggregations of stitches produced with exacting, time-consuming labor—each mirroring the individual artist's tastes and interests—that seem to propagate, even now, on the fabric or shirt.

You may cock your head on seeing MARUKI Suma's *Cherry Blossom Viewing*, whose large figure seated mid-canvas deviates entirely from perspective. In SHUJI Takashi's *Rabbit and Driftwood*, waiting on the wall behind you, you will surely search for the something resembling driftwood while noting the position of the rabbit's hind leg. The drawings by HIROYUKI DOI, across from Shuji's work, display delicacy and strength, and generate a world of amazement that will stir your emotions.

As you exit the room, you may feel a jolt of surprise on seeing SUENAGA Fuminao's *Boxes for Paintings*, which are easily mistaken for cardboard boxes. Other "interventions" by Suenaga, who observes and skillfully illuminates an object's relationship with the space in which it is placed, lurk throughout the exhibition rooms. In the next room, an embroidery work by MATSUOKA Ryo promptly seizes your eye. Matsuoka's physical presence emanates from its dynamic lines, rendered with a sewing machine. On encountering YAMAMOTO Junko's appliques, you might think it strange to find a large boot arrayed alongside pumpkins, rice, and soba noodles. The last small surprise—FUJIOKA Yuki's finely sliced and curling paper strips, which do not look like paper at all—are certain to make you gasp in astonishment.

Depicting thoroughly ordinary objects and scenes and using common techniques and materials available to anyone, the exhibited artists look freshly at events and systems we take for granted. And with creativity surpassing imagination, they impart to us new opportunities for discovery. They also offer surprises concerning the often sharply delineated and sometimes murky boundary between Art Brut and art discussed in other contexts; surprises, I believe, that hold a power to turn Art Brut loose.

I fervently hope the small surprises awaiting discovery in this exhibition will contribute to opening Art Brut, not to mention viewers' habits of seeing.

## Artists' Biographies

### NISHIOKA Koji [p. 11]

A musical score is NISHIOKA Koji's synonym. Having enjoyed music since childhood, when classical music was his lullaby, Nishioka began to draw using the score as a motif after an old piano was donated to the studio he attended. Fine lines representing the five-line music staff dance joyously in his pictures, while notes, letters, symbols and numbers cluster densely and sometimes array themselves freely in the picture's margins. A large ellipse suggesting a note of music may actually be a beam connecting several notes. The rhythmic picture emerging from Nishioka's pen is rich with small surprises for the viewer.

Born in Osaka Prefecture in 1970. Began creating art at "Atelier CORNERS" in Osaka in 2005. Recent exhibitions include *Art Brut du Japon, un autre regard* (Collection de l'Art Brut, Lausanne, 2018-19). His works can be found in the Collection abcd in Paris and Outside In in Chichester, England. [SM]

### KOBAYASHI Yuki [p. 13]

"By means of simple patterns I visualize deviation," KOBAYASHI Yuki says concerning the rectangular patterns often appearing in his art. As this suggests, Kobayashi is motivated by a strong interest in the emotions and perceptions that arise when he is bound by constraint. An intent to expose the loss of freedom created by restrictive social codes toward sex is central to the acts of bodily expression he undertakes in parallel with painting. In performances staged wearing women's clothing or with body tied, Kobayashi unmasks sexual preconceptions and instilled gestures, and challenges the viewer's gender perceptions and stereotypes concerning physical freedom.

Born in Tokyo in 1990. Lived and worked in Europe until 2019, completing the Performance Pathway at the Royal College of Art in 2016. In recent years, Kobayashi has created the performance series "Life of Athletics" (VACANT, Tokyo, 2018). [ID]

### OZASA Itsuo [p. 15]

There are consistent qualities, apparent over many years, that define OZASA Itsuo's uniqueness—the exquisite, humorous compositions, the outstanding sense of color, and the somehow charming expressions and gestures of his animals. The way his motifs extend from the frame leaving only half their figure visible is particularly characteristic. Ozasa was first introduced to the world in the *Japanese Outsider Art* exhibition (1993) held at Setagaya Art Museum in conjunction with *Parallel Visions: Modern Artists and Outsider Art*, which introduced such artists as Henry Darger and Aloïse Corbaz. Collected the following year by the Collection de l'Art Brut in Lausanne, Switzerland, he achieved acclaim as a leading Japanese artist.

Born in Kyoto Prefecture in 1924, died in 2012. Entered Mizunoki-Ryo dormitory (now Mizunoki, Kameoka City) in 1962. A founding member of the painting class launched at Mizunoki from 1964, his talent began to flourish. [ID]

### TOMOTO Shisuko [p. 17]

Painting not only on paper and canvas but also on whiskey bottles and shells collected in her neighborhood, and sometimes a *katatsu* table top, TOMOTO Shisuko depicted memories of her childhood, events around her, and landscapes in vivid colors. Tomoto incessantly explored the possibilities of materials and researched techniques and effects applicable to her painting surface or support. This can be seen in her deft handling of a bottle's irregular shape in modeling her motif and in her use of faintly related motifs and colors when painting on different size canvases or different supports, such as a canvas and bottles, to produce works strikingly different in impression.

Born in Kumamoto Prefecture in 1913, died in 2005. At age 53, Tomoto scraped the oil paint off canvases left behind by her son, who had aspired to be a painter, and began to paint by observing and imitating. Her works are in the Setagaya Art Museum. Since their appearance in that museum's 10th anniversary exhibition *From The Collection Naivety in Art: A Decade of Exploration* in 1996, she has been viewed in the context of naive art and Art Brut. [SM]

### HOLLINGSWORTH, Dennis [p. 19]

Whether large, luscious strokes, textured layers of paint, smears suggesting the traces of pushing and scraping, or a hemisphere bristling with thorns like a plant seed, Dennis HOLLINGSWORTH uses paint for wide-ranging expressive effects. Searching intently for his own original techniques—such as his "wet on wet" application of paint to a wet canvas—Hollingsworth creates paintings that abound with sculptural qualities. Along with the three-dimensionality of his thick lines and paint globs, which transpire at the intersection of chance and regularity, figures such as flowers, letters, people, and animals also appear in his paintings. This reflects his stance as an artist who pulls the viewer's eye into spaces inside and outside the painting.

Born in Madrid, Spain in 1956. Graduated from Claremont Graduate University in 1991. Has held numerous solo exhibitions in Japan, USA, and Germany. His main solo exhibitions in Japan include *Dennis Hollingsworth Exhibition* (Tomio Koyama Gallery Kyoto, Kyoto, 2011). [ID]

### nui project [p. 21]

YOSHIMOTO Atsushi, ARIMURA Aiko and NOMAGUCHI Keisuke create together in the nui project. Naturally, the three approach embroidery each in their own way. Yoshimoto's embroidery works, which employ a technique of fixing ball knots in repetitive series, are in every case delicate yet differ in impression depending on their combination of materials. Arimura twists embroidery threads of many colors, concentrating and propagating the bunched, tightly twisted threads in a limited area. Nomaguchi, meanwhile, invests time in repetitious sewing so that his work naturally takes on a sense of weight. This is combined, however, with a style of bunching the fabric by pulling the threads tightly, just the right amount, to produce a work of striking impression.

Nui project is a group of sewers who work in the "Textiles Studio" at Shobu Gakuen in Kagoshima City. After originally subcontracted to make Oshima Tsumugi kimono fabric, they shifted to sewing that values their own free creativity. Nui project began in earnest in 1992. From around 2000, the group has shown in *Fabulous Fabrics: Made in Japan* (Creative Growth Art Center, Oakland, 2003) and other exhibitions. [SM]

### MARUKI Suma [p. 25]

A prolific painter, MARUKI Suma created more than 700 works featuring richly expressive animals and vibrant flowers and vegetables. Maruki's paintings are marked by a playful boldness. She breezily devises her own linear perspective and other rules of painting by establishing a

dominant human figure far larger than the other motifs or painting a tree trunk or branch over a spirited-looking animal. Already over 70 years old when starting to paint, she has often been called a "grandma painter." A look at her paintings, skillfully composed and commanding wide-ranging techniques, dispels this image, however.

Born in Hiroshima Prefecture in 1875, died in 1956. After losing her husband and relatives in the atomic bomb blast in 1945, she began painting with the encouragement of her son and his wife, painters MARUKI Iri and Toshi. In 1951, three years after starting to paint, her work was selected for the Nihon Bijutsu-in Exhibition for the first time. In the 1986 *Naively in Art* (Setagaya Art Museum, Tokyo), Maruki was featured in connection with naive art. [SM]

### SHUJI Takashi [p. 27]

While brown, blue, and white also appear in SHUJI Takashi's works, they are distinguished above all by masses of black. Bending over his paper as if covering it with his body, face down and hands stroking the paper surface, he draws unique forms of his own while observing his subject. His motifs include pots, vases, tools, and other objects around him, and animals inspired by picture books, but their figures are often cut off, incomplete, at the edge of the sheet. The movement of Shuji's eye and hands can be traced in his dynamic forms, particularly in the black masses and paper margins.

Born in 1974 in Hyogo Prefecture. Since around 1993, Shuji has produced artwork in the twice-monthly "Suzukake Painting Club" (Nishinomiya City). His main exhibitions include *Japon* (Collection de l'Art Brut, Lausanne, 2008-09) and *Art Brut Japonais* (Halle Saint Pierre, Paris, 2010-11). Shuji's works can be found in various collections, including the Collection de l'Art Brut in Lausanne. [SM]

### HIROYUKI DOI [p. 29]

The tiny agglomerations of circles drawn by HIROYUKI DOI with one kind of super-fine oil-base drawing pen create a dense yet powerful world. After exploring various genres, Doi around 1985 settled on this method of drawing fine circles. Skillfully applying the effects of thin, beautiful lines and circles, drawn with a pen whose tip has grown finer with use, he produces soft gradations in his picture. *Peace* [cat. no. 020] is a work he completed one time and then returned to and further developed. It is fascinating to observe the differences in circle shape and density that have emerged as his technique has changed over time, in its central almond-shaped portion and surrounding flame-like figures.

Born in Aichi Prefecture in 1946. While working as a chef for many years, Doi taught himself to paint and began creating artworks. Since 2001, he has been active mainly in Europe and the United States. Recent exhibits include *Memory Palaces: Inside the Collection of Audrey B. Heckler* (American Folk Art Museum, New York, 2019-20). His work is in such collections as the American Folk Art Museum in New York. [SM]

### FUJIOKA Yuki [p. 33]

FUJIOKA Yuki started out creating collages collaboratively with his mother. He would cut paper into geometric shapes, and his mother would arrange and glue the shapes to a paper backing. As his attachment to the action of cutting grew, however, his interest shifted from "cutting shapes" to "slicing." Currently, this has developed into slicing thin paper strips less than 1 mm wide. By tilting the scissors slightly as he cuts, he gives the thin strip a fine curl. As he intertwines the super-fine paper strips, which are easily mistaken for unraveled thread, he carefully mixes the paper's rear and front colors to impart gradations to his work.

Born in Kumamoto Prefecture in 1993. As a child, Fujioka came to enjoy the action of cutting after borrowing his grandmother's scissors. In recent years, he is participating in exhibitions overseas. His main exhibitions include *ATTITUDE 2002* (Contemporary Art Museum, Kumamoto, 2002) and *Art BrutJapan-Schweiz* (Museum im Lagerhaus, St. Gallen, 2014). [SM]

### MATSUOKA Ryo [p. 36]

An important figure in the live painting scene, MATSUOKA Ryo astonishes viewers with his expressive speed. Often, he will use his bare hands, and he sometimes creates using a sewing machine, but in every case, the artist's rhythms take direct form in the artwork. Brightly colorful lines emerge in succession from his nimble movements. The you-are-there realism of his art arises—as purely as lines and shapes improvised by walking in snow—from the thorough unity of his art and bodily actions. Despite his appearance before them as an individual with his own physical characteristics, viewers feel comfort in the naturalness of his movements, which reflect the structure of the human body, and the universalness of the pleasurable feelings they get from his colors and lines.

Born in Tokyo in 1974. Has participated in numerous exhibitions in Japan and overseas, and actively undertakes live painting and creative collaborations. [ID]

### YAMAMOTO Junko [p. 39]

YAMAMOTO Junko's distinctive forms are at once figurative and abstract. Yamamoto simplifies kitchen gadgets, food, cleaning equipment, tools, and other items familiarly seen in everyday life, and applies them using colorful felt pieces. Seams are an important element in Yamamoto's appliques, along with shape and color scheme. The movement and traces of Yamamoto's hands also achieve rich expression in her material, such as the folding back and stitching of the four sides of the ground fabric and her blind stitching of the felt. This richness is apparent in the purple stitch depicting thin soba noodles and stitch forming bumpy irregularities on a pumpkin seen in a piece featured in this exhibition [cat. no. 032].

Born in Hyogo Prefecture in 1973. Yamamoto was drawn to felt among the materials her mother used in her handicraft studio and began creating felt appliques on her own. Her works are included in Collection abcd, Paris and the world's only wandering museum, the London-based Museum of Everything. [SM]

### SUENAGA Fuminao [p. 41]

Through images of everyday things, as well as existing objects established in the exhibition space, SUENAGA Fuminao skillfully and with exceeding care utilizes the relationship that objects possess with the space in which they appear. By this means, he captures and holds the viewer's attention. Suenaga primarily employs a method of extracting elements of each motif's surface and simply copying them on a panel of the same size. Color fields large and small, sometimes containing patterns, are also a major feature of his art. The color of his complex point mix, the faint brush marks on the carefully painted surfaces, and the small rise that occurs along the boundaries of the color fields make us conscious that, even if three-dimensional, the work is a "painting."

Born in Yamaguchi Prefecture in 1974. Graduated from Department of Fine Arts, Tokyo Zokei University in 1999. Suenaga has produced many series, including "Three-dimensional paintings with motifs of daily necessities" and "Museum Pieces." Recent exhibitions include *Publicness of the Art Center* (Phase I & II) (Contemporary Art Gallery, Art Tower Mito, Ibaraki, 2019-20). [SM]



## 主要参考文献 Bibliography

### 【展覧会カタログ Exhibition Catalogues】

『開館記念展 芸術と素朴』カタログ、世田谷美術館、1986年。  
『パラレル・ヴィジョン 20世紀美術とアウトサイダー・アート 日本のアウトサイダー・アート』展カタログ、世田谷美術館、1993年。  
『開館10周年記念特別展 コレクション10年の歩み 芸術と素朴』カタログ、世田谷美術館、1996年。  
日本障害者芸術文化協会編『このアートの元気になる エイブル・アート'99』展カタログ、東京都美術館、1999年。  
『みずのき寮からの発信 言葉はいらない 魂との出会い』展カタログ、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、1999年。  
『デニス・ホリングスワース新作展』カタログ、小山登美夫ギャラリー、2002年。  
国立民族学博物館監修、佐藤浩司・山下里加編『ブリコラージュ・アート・ナウ 日常の冒険者たち』展カタログ、国立民族学博物館、青幻舎、2005年。  
Exh. cat., *Art Brut du Japon*, Collection de l'Art Brut, Lausanne, INFOLIO: Gollion, 2008。  
三ツ木紀英編『マイ・アートフル・ライフ 描くことのよろこび』展鑑賞ハンドカタログ、川口市立アートギャラリー・アトリア他、2008年。  
『Stitch by Stitch ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描くわたし』展カタログ、東京都庭園美術館、2009年。  
『アール・ブリュット・ジャポネ』展カタログ、埼玉県立近代美術館他、現代企画室、2011年。  
『糸の先へ いのちを紡ぐ手、布に染まる世界』展カタログ、福岡県立美術館、2012年。  
『アンリ・ルソーから始まる 素朴派とアウトサイダーズの世界』展カタログ、世田谷美術館、2013年。  
『すごいぞ、これは!』展カタログ、埼玉県立近代美術館他、心揺さぶるアート事業実行委員会、2015年。  
『丸木スマ展 おばあちゃん画家の夢』カタログ、三岸節子記念美術館、2017年。  
アール・ブリュット・コレクション編『日本のアール・ブリュット もうひとつの眼差し』展カタログ、国書刊行会、2018年  
(Exh. cat., *Art Brut du Japon, un autre regard / Art Brut from Japan, Another Look*, Collection de l'Art Brut, Lausanne, 5 Continents Editions: Milan, 2018)。  
『アートセンターをひらく』展記録集、水戸芸術館現代美術ギャラリー、2019年。

### 【その他図書 Other Books】

丸木スマ『丸木スマ画集』大塔書店、1954年。  
『画集 塔本シスコはキャンパスを耕す』塔本賢一、1992年。  
西垣籌一『無心の画家たち 知的障害者寮の30年』日本放送出版協会、1996年。  
西村陽平監修『みずのきの絵画 鶏小屋からの出発』東方出版、2003年。  
はたよしこ編『DNAパラダイス 27人のアウトサイダーアーティストたち』日本知的障害者福祉協会、2003年。  
工房しょうぶ編『縫 nui project 2』社会福祉法人太陽会、2007年。  
岡村幸宣編『画集 丸木スマ 樹・花・生きものを謳う』原爆の図丸木美術館、2012年。  
宮脇豊編『塔本シスコ生誕100年記念 シスコと生きる』ギャラリー宮脇、2013年。  
福森伸『ありのまがあるところ』晶文社、2019年。

※上記文献のほか、各作家、関係者へ行ったインタビュー内容も参考にした。

## コピーライト／写真クレジット

Copyrights/Photo Credits

© atelierCORNERS (pp. 10-11)  
© Yuki Kobayashi (p. 12)  
© 2016年 SHOBU STYLE (pp. 20-22, 23上)  
© HIROYUKI DOI (pp. 28-29)  
© Junko Yamamoto (pp. 38-39)  
© Fuminao SUENAGA (pp. 40-43)

写真撮影・提供

Photographer and Courtesy

柿島達郎／KAKISHIMA Tatsuro (pp. 8, 9, 13, 17-19, 23下, 28-45, 48)  
塩田洋／SHIOTA Yo (p. 16)  
大西暢夫／ONISHI Nobuo (pp. 26-27)

特定非営利活動法人コーナス／CORNERS (pp. 10-11)  
みずのき美術館／MIZUNOKI MUSEUM of ART, KAMEOKA (pp. 14-15)  
アートオフィス塔本／Art Office Tomoto (p. 16)  
社会福祉法人 太陽会 しょうぶ学園／SHOBU STYLE (pp. 20-22, 23上)  
原爆の図丸木美術館／Maruki Gallery for the Hiroshima Panels Foundation (pp. 24-25)  
日本財団／The Nippon Foundation (pp. 26-27)

## 東京都渋谷公園通りギャラリー グランドオープン記念事業 展覧会「あしたのおどろき」

### 【展覧会】

企画・運営：佐藤真実子、石田大祐、河晴美、小山紫（東京都渋谷公園通りギャラリー）

広報物デザイン：カイトモヤ、原田ゆりえ（株式会社ルームコンポジット）

広報物印刷：関東図書株式会社

会場構成：家成俊勝、土井亘（ドットアーキテクト）

### 【カタログ】

企画・執筆：佐藤真実子、石田大祐

編集統括：大橋穰

編集：佐藤真実子、小山紫

翻訳：ブライアン・アムスタッツ（アムスタッツ・コミュニケーションズ）

デザイン：カイトモヤ、前川景介（株式会社ルームコンポジット）

印刷：株式会社シナノ

発行：（公財）東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

発行日：2020年3月31日

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery Grand Opening Commemorative Exhibition: Open to Surprises

### [Exhibition]

Curators: SATO Mamiko, ISHIDA Daisuke, KAWA Harumi, KOYAMA Yukari (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Publication Design: KAISHI Tomoya, HARADA Yurie (room-composite)

Publication Printing: Kanto Tosho Co., Ltd.

Venue Design: IENARI Toshikatsu, DOI Wataru (dot architects)

### [Catalogue]

Texts: SATO Mamiko, ISHIDA Daisuke

Editorial Direction: OHASHI Minoru

Editing: SATO Mamiko, KOYAMA Yukari

Translation: Brian AMSTUTZ (Brian Amstutz Communications)

Design: KAISHI Tomoya, MAEKAWA Keisuke (room-composite)

Printed by: SHINANO Co., Ltd.

Published by: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,  
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Publication Date: March 31, 2020

Artwork © The Artist

©2020 Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



東京都渋谷公園通りギャラリー  
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

文化でつながる。未来とつながる。  
THE FUTURE IS ART

**TokyoTokyo**  
FESTIVAL